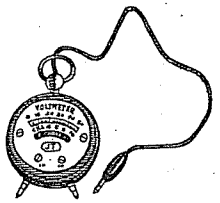
インド・ニューデリーにおける講演会から

牧口常三郎と価値創造

人間教育をめざして

サティッシュ・クマール
栗原淑江 訳



はじめに

本日、こうして、戦前の日本における指導的教育改革者である牧口常三郎氏について講演する機会を与えていただき、感謝いたします。牧口氏は、価値創造的な教育の概念を提唱した、すぐれた教育者です。牧口氏の理念は、今や世界中で評価されるようになり、各国の研究者たちは、彼の理念をそれぞれの領域に導入しようと試みております。今日お集まりの著名な教育実践者の方々の前で、私が新たな議論を提示する任に耐えられるかどうかはわかりませんが、牧口氏の理念のいくつかを紹介させていただきたいと思います。

本題に入る前に、本日の『インド・タイムズ』(デリー版)に掲載されていたニュースについて、述べたいと思います。それによると、いつも黒い服を着ていた、クラスメートとうまくつきあってゆけない男子生徒、別の言葉でいえば「あぶれ者」であった少年が、家で家族と口論になった際、銃を取り出して、母親、父親と二人の姉妹を撃ち殺しました。それから、彼は、銃をもって学校に向かい、授業の合間に、ガールフレンドやクラスの何

人かの生徒に銃を見せたりしました。そして、授業が終了した後、教師に犯行を打ち明けたのです。

この事件は、アメリカだから起こりえたといわれるかもしれません。しかし、社会と世界がますます大規模にグローバル化し、統合化している現在、もはやアメリカだけに起こる事件とはいえないのです。私たちは、こうした事件を看過することはできません。問題の少年は、なぜ、クラスの仲間たちと親しく交わることができなかったのでしょうか。なぜ彼は、仲間のグループと交流できなかったのでしょうか。また、なぜ彼は、そのような恐ろしい犯罪を犯してしまったのでしょうか。そして、なぜ彼は、その怒りや欲求不満を自らの家族に語り、説明することができなかったのでしょうか。

こうした問題が起こる背景としては、青年の間で、本質的な価値観、倫理、行動規範が崩壊していることがあげられるでしょう。

もう一つの例として、私自身の体験をお話したいと思います。これは、私が、ジャワハルラル・ネルー大学の哲学部の大学院で、プログラム・コーディネーターとして、学生に真理の価値について教えていた折りに経験したものです。

ある日、一人の学生がやってきて、休暇で家に帰るために列車の偽造乗車券を使用したいが、それを許可してほしいと頼むのです。彼は、私たちのセンターでも五本の指に入るほどの優秀な学生です。彼が語るところによると、昨年父親を亡くしたため、休暇の後にデリーに戻るための経済的な援助を得ることができないというのです。私は、牧口先生だったら、こうした学生をどのように扱うだろうかと考えました。私は、この学生に同情し、少しの間、無力感をおぼえました。しかし、すぐに気を取り直し、彼を指導したのです。

私は彼に対し、不正な手段を使うことは何の価値も生まないと話しました。彼は今、一時的には貧しいかもしれません。しかし、不正をすることによって、彼は精神的にいっそう貧しくなるのです。私は、学問の世界で記録的な業績をあげたとしても、頭を高くあげて歩くことはできなくなるのだと話しました。さらに、私自身も、学生時代、一切の経済的援助がない中で学位論文を書き

あげたことを話し、苦労を分かち合ったのです。彼は、私の体験にすっかり打ちのめされたようでした。そして、生涯にわたり決して不正な手段を考えないと決意してくれたのです。私は、決して環境に負けてはいけないと語りました。彼は、強くなりますと言い、将来も弱さに屈伏しませんと約束してくれました。

このことは、私が自分の環境の中で価値を生み出すことができたという点で、大きな意義をもっています。私は、彼に、運賃を支払うだけの収入を得ることができるよう、夏季の仕事を提供しました。私は、日常生活において価値創造をすることの重要性に気づかせてくれた池田大作氏に、心から感謝しています。

経済と社会が急速に変化するとき、また、快楽主義の追求が時代の主流となっているとき、諸価値は日増しにむしばまれてゆく傾向があります。そして、大人たちの中で成熟する青年は、大人と同じ弊害を身につけ、同じような犯罪を犯すようになります。私たち教師は、価値を創造し、それを教え込む仕事に携わっていますが、それは、自身がそうした価値を大切にしなければならないだけでなく、他の人々がそれらを正しく評価し、それらに従うようにするためでもあるのです。したがって、価値は、人間的なものでありうるだけでなく、つねに、人間のために、人間によって定義されるものなのです。

ガーリ（B.M. Ghali）は、「人間的価値は社会的原理であり、それは自律、価値と人間の尊厳という基礎的前提の上に打ち立てられなければならない」と指摘しています。しかし、池田氏が述べるように、「学問はしばしば政治に取って代わられ、多くの制度において危機的な状況がみられる」のです。

私たちが、牧口氏の価値論の偉大な洞察と、それが二十一世紀に対してもつ意義を認識するのは、そうした危機的な状況の下なのです。

一　牧口常三郎について

牧口常三郎氏は、一八七一年に日本の北西地域（新潟県）の貧しい家に生まれました。六歳のときに叔父の養子となり、以後、そこで育てられました。彼は非常に貧しかったので、満足に学校に行くことができず、警察署

で職を得て働くかたわら、教師になるための勉強をしました。そして、一八八九年に北海道尋常師範学校に入学し、一八九三年にそこを卒業しました。

一九一三年に、彼は東京で尋常小学校の校長に就任し、以後、校長の職を歴任しています。彼の信念は、「学校は社会の道徳的病理を治癒しなければならない」ということでした。このような理念は、アメリカの教育者、ハロルド・ラッグ（Harold Rugg）の思想と共通するものがあるでしょう。

牧口氏は、価値創造の理論を発展させました。彼は、真・善・美という西洋哲学の概念を、利・善・美という価値観に部分的に変更させたのです。「利」とは、人々が社会生活の中で、各々の行為によって、得たり失ったりすることを意味します。私たちは、調和に向かって動くのでしょうか、それとも不調和でしょうか。また、私たちは、完全な人間に向かって進んでいる――人間革命――のでしょうか、それとも、いわゆる生命のマイナスの面によって落とし穴に陥るような奴隷状態に入るのでしょうか。

仏教的教育の本質的な目的は、いかなる状況にあっても崩れることのない、普遍的な生命哲学をもった人間を育成することにあります。そして、その哲学は、人々が自らの環境に挑戦するのを助けるのです。

すべての人間が、通常の意味で同じ能力をもっているわけではありません。しかし、自らがもつ能力を完全に発展させるための潜在的な力は、同じようにもっているといえます。たとえば、ある人は紅茶カップくらいの大きさの能力しかもっていないかもしれません。しかし、それを発展させ、溢れさせれば、その人は満足し幸福でしょう。また、大きな樽くらいの能力をもっている人もいるかもしれません。しかし、それが半分しか満たされなければ、その人は満足できないでしょう。

二　創価教育の源流

創価教育学の源流は、一九三〇年十一月十八日に、牧口常三郎によって『創価教育学体系』第一巻が発刊されたことにさかのぼります。牧口氏は、その教育理論の目的をたずねられたとき、「価値を創造すること」であり、

「価値を創造することが、教師の役割である」と答えています。牧口氏は、価値創造的教育の特質を、「青は藍より出でて、なお藍より青し」という表現を用いて表しています。これが意味することは、藍によって染められたものは、藍自体よりも青くなるということです。私は、これを、私の人生と職業におけるモットーとしています。教師は、全存在をかけて、自身よりも偉大で優れた弟子や学生を育成しなければなりません。そうした教育は、威圧的であったり、強制的であったりすることはありえません。教育の核心は、教師と学生が共に学ぶ過程にあり、教師が生徒の能力を引出し、生徒が教師を凌ぐ能力をもつまで高めることにあるのです。

三　牧口の教育改革の理念

かつて、牧口氏は語っています。「教師は、自分のように偉くなれというような、傲慢な態度で学生を指導するべきではない」と。恒久平和を持続させ、人々ができるかぎり意味のある人生を送れるような、人間的な世界秩序を構築するためには、まず第一に、教育制度において基礎的な改革がなされることが要請されます。牧口氏によれば、これは、現実の学習生活に対して親密で、全体的に関わろうとする教育科学と結びつくものです。価値創造的な教育は、次のような諸状況を満たすのに役立つでしょう。

1　教育は、より大きな経済的利害や能率といったものの中で、能率化される必要があります。それは、教育政策や教育技術のレベルでの改革によってのみ、可能となるでしょう。二十一世紀のための教育政策が、十九世紀や二十世紀の要請に基づいているならば、人的資源を効果的に利用したり、生産力を最大限に利用することはできません。このことは、教育と雇用を、不釣り合いなものとさせるでしょう。

2　盲目的な教育法は、放棄されなければなりません。私たちは、自身の不完全さの産物にすぎない一時的な教育法を採用することはできません。そのような教育法は、教師が職業に対する情熱を失うときに、また、学生が教

師のために存在すると考えるときに生まれます。そうなると、学生の探究心は失われ、学問や家族や社会の探究としだいに疎遠になるでしょう。そうした病を癒すために求められているものは、明らかであります。池田氏が指摘するように、「人間教育と道徳的成育の崩れざる黄金の法則は、教師の熱心な関わりにこそある」のです。こうしたことが可能なのは、学習が行動と調和したとき（知行合一）のみであり、それが価値創造の基盤を形成するのです。

3　そうした変革を実現するためには、教育者を優待するとともに、思慮深く選択する必要があります。牧口氏は、小学校長登用試験制度論と、師範教育根本的改革案とを提出しています。

4　牧口氏は、不徹底な実業教育制度には反対の立場をとっていました。そして、半日学校制度を提案しています。教育が生産的で価値創造的であることを保証するためには、教育制度も教育方法も、非実業的な教育家の手から取り戻し、実業家自身に行わせなければならないと示唆したのです。これは、現実の生活における行動にそった教育を意味します。半日学校制度の中で、社会におけるプロフェッショナルの指導の下に、心身の訓練をバランスよく行うこと（心身平衡）を主張したのです。

牧口氏は、『創価教育学体系』の緒言において、次のように述べています。「学の名を冠すとはいえ、余は最初から一科の学を云為しようと企図したものではない。日常の職務遂行の必要上から反省し思索したメモリーの堆積に過ぎない。守銭奴が一文二文を惜しんで溜める僻の様に、余も又日常生活の間に往来する思想の涓滴の散逸を恐れて、書き採って置いたのが、教育生活に入って以来三十余年にも亘ったために、いつの間にか積り積って反古紙の山を築いてしまった」と。

牧口氏が職歴を開始した時期は、新生日本について、および、教育の社会的役割や責任などについて、大きな議論が巻き起こっている時代でした。一方では、伝統主義者や儒学者たちが、教え込まれるべき第一の価値は忠誠と従属であると論じました。教育は、よい「臣民」を生み出すべきものであるとされたのです。また、他方では、学校教育は、市民を独立精神をもつよう教育するものであり、未来のために最も役に立つものであると論じる人々もいました。

牧口氏は、学校教育が社会の道徳的病理を治そうとしないならば、結果的に問題を加えるだけであると考えました。彼は、社会的・経済的発展のカギを握るものこそ教育であると考えていたのです。教育政策の変革は、全体としての社会を再活性化する道であります。牧口氏は、教育制度の合理化をめざし、そのための計画を作成しました。そこでは、東洋の伝統を反映して、生命におけるバランスと調和を要求しています。すなわち、人間性の完全な発展――心身の統一です。

四　牧口氏の著作にみられる基本的テーマ

牧口氏は、日本の教育制度に不十分さを感じ、深く悩みました。当時の社会における教育制度の複雑性を理解するために、また、生活の中心的意義にふさわしい制度改革を行うために、彼は闘ったのです。

1　教育の目的

教育において目的を確定する過程は、牧口思想の核心であったといえます。彼は、教育の目的は、一般民衆の要求と日常生活から引き出されなければならないと考えました。目的観の明確な教育を要求したのです。そして、その目的は「幸福になる」ということにあるとしました。彼は、その目的を、社会生活に十分に関わりるものと定義しました。彼は、試験による教育の支配には明確に反対していました。

牧口氏によれば、教育の目的は、「盲目的の生活を明目的の生活に、無意味の生活を有意味の生活に、無価値の生活を有価値の生活に、反価値の生活を正価値の生活に、低価値の生活を高価値の生活に、無益の行動を有益の行動に、有害の行動を有利の行動に、不善の行動を善良の行動にと指導する原理を得んとするにある」のです。

2　幸福

牧口氏は、幸福の実現が、教育の第一の目的であると主張しました。そして、あらゆる教育計画と教育プログラムは、幸福の実現が教育の第一の目的であることを基本的に理解することから始まらなければならないと主張したのです。各々の人々が社会意識に目覚めれば、それを達成することは可能です。そうした社会意識は、あらゆる人間がいかに社会に恩を受けているかを理解し、評価することを可能にするのです。人々が生きている社会は、人々の基本的欲求のためだけにではなく、幸福を構成するすべてのもののために存在するのです。

3　価値創造

牧口氏の教育思想の第三のテーマは、人間は本来創造的であるという認識です。彼によれば、創造的であることは人間性の本質なのです。人間は、創造的能力が破壊されない限り、行為の中で創造性を表現するでしょう。

一九三〇年に、彼は「人間には物質を創造する力はない。吾々が創造し得るものは価値のみである。所謂価値ある人格とは価値創造力の豊かなるものを意味する。その人格を高めんとするのが教育の目的で、此の目的を達成する適当な手段を闡明せんとするのが創価教育学の期する所である」と記しています。実際、価値創造は、まさに人間性といってよいでしょう。ある人をその性格の強さのために賞賛するときには、実は、その卓越した価値創造の能力を賞賛しているのです。私たちは、このことを、学生と相互に交流する中で、実際に明らかに示すことができます。

そこで残る基本的な問題は、いかなる目的に向かい、また、いかなる目的の利害の中で、人間の価値が方向づけられるかということです。牧口氏は、それは適切な教育によると主張します。人間は、自分自身の生活を向上させるため、および、自分の共同体のために最大限に利益を生み出すために、創造的能力を用いようとするでしょう。これこそ、牧口氏がいう価値創造なのです。牧口氏の思想においては、十分に幸福で満足した人間は、個人的生活と、個人の共同生活を構成する独立した関係のネットワークを最大限に高めるような、価値創造の真っただ中にいる人間です。そして、創価教育は、そうした目的に向けて示唆を与える教育なのです。

①学習過程の本質と教師の訓練

牧口氏によれば、単なる知識の伝達は、教育の最終的な目的ではありませんし、けっしてそうであってはなりません。彼によれば、教育の目的は、「学習過程へと導き、学生自らの手に学ぶ責任を与えること」です。こうした理念は、新しいものではありません。むしろ、コメニウス（Johann Amos Comenius）、ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi）や他の何世紀も前の人々によって形成されてきた理念を繰り返したものといえます。このような理念は、牧口氏の、保守的でない、改革的で独立的な精神に深く関係するものであります。彼は次のように主張しています。「人間生活は、価値創造の過程であり、教育はその目的へと導くものでなくてはならない」と。

②人間の尊厳と価値創造

日常生活において価値に到達し、それを実現することが可能なのは、私たちの生活の固有の可能性を認識して生きるときだけだといえましょう。事実、教育の目的は、価値創造者として生きることを学ぶのを助けることにあります。

教育は、現実生活の諸問題を扱わなければなりません。教育の真の価値は、現実生活に適用されたときに現れるものです。実際、創造は価値だけに適用され、真理に適用されるのではありません。というのも、真理は発見の時点で止まりますが、価値は単なる発見を越えて進むものだからです。また価値は、ある程度共存することが可能ですが、真理は唯一のものとされるからです。

五　人間教育および人間教育の発展における東洋哲学の役割

池田氏は、牧口氏の理念を発展させる中で、知識と智慧を融合するための基盤として、「人間教育」を強調しています。教育制度は、人間的な価値から離れて、もっぱら実業界での仕事のために有効な技術に焦点を当てつつあり、ますます商業主義化されつつあります。池田氏は、指摘しています。「教育者は、現代社会の害毒と対

決し、人間教育を推進しなければならない」と。創価教育体系に体現された人間教育の主な特徴は、次のように要約されるでしょう。

1　信頼

まず、信頼の回復が強調されます。私たちは、教師として、学生との間に信頼を生み出すことができます。教師は、学生の成長のために存在しているのです。そうした信頼は、学校や少年少女の間に増大している暴力を減少させることができるでしょう。教室の中で、そうした信頼関係を打ち立てることができるかどうかは、多くの場合、教師自身が学生を信じているかどうかにかかっています。池田氏は、述べています。「信じるということは、人々を結びつける最も強固な絆である」と。

2　知識と智慧の融合――東洋哲学

知識のための知識の追求は、人類の幸福を生み出すことはありません。発展や近代化が国際的に進む状況の下で、伝統を象徴する人間的価値や社会的目的は過去へと退きつつあります。それはなぜでしょうか。それは、手段それ自体が、目標と考えられているからです。しかし、進歩は、人間的諸価値に基づいた社会的目的と社会的目標によってのみ、定義されるべきでしょう。集団的目的のために生み出される知識は、幸福に導くことはないでしょう。そうした知識は、物知りで未熟な、冷たい心をもった人間を生み出すだけであると思われます。一方、智慧は、集団的に生み出されるにしても、個人的に同一化されるにしても、さらなる永続的な価値を創造することができるのです。

3　アヒンサー――非暴力

池田氏は、ガンジーの思想、「非暴力」の精神を研究した後、これこそが人間存在の全体性を回復する唯一の道であるという結論を引き出しました。著名なガンジー主義者、アーチャルヤ・ヴィノーバ・バーヴェー（Acharya Vinobha Bhave）の言葉、「今こそ、正しくヴィディヤー（科学的知識）をアートマヴィディヤー（自己省察）と統合すべきときである」を引いて、こうしたことは、科学的な責任倫理へと導くだろうと指摘しているのです。科学的な責任倫理においては、個人が統制されるのではなく、研究所、研究財団、政府や産業が統制されるべきだとされます。後者は、大量の知識を生み出すものだからです。

4　国際的精神と意識の高い市民

さらに、東洋哲学を基盤とする人間教育が望んでいることは、国際的精神にあふれた人間を育成することです。これは、子どもたちが、成長期に世界の指導的な学者たちの精神と接触することによって可能となります。その目的は、環境問題、難民問題、軍備の問題、「生活の質」の問題といった国際的諸問題に鋭い感覚をもつよう育成された、地球市民を生み出すことにあります。池田氏によれば、これが可能となるのは、教育者が若い学生たちの小さな努力にも細やかな注意を向けてあげるときなのです。そうしたことは、信頼を打ち立て、教育を活性化するでしょう。

したがって、教育概念を現実化する必要がありますが、それは、平和の世紀の夜明けの先触れとなるでしょう。また、教育実践を支えるものは、あふれる情熱と創造性でなくてはなりません。さらに、人々との友好を打ち立てる喜びを共有することのできるあらゆる人々の間に、いっそうの教育交流を行うことが求められるでしょう。池田氏は、人間教育の理念を説明して、「自らが権威の魔に隷従してはならない」と述べています。

また、教育における自己信頼の質を高めることも、本質的なことです。教師たちは、ヒューマニズムの精神を堅持し、学生を最重要のものとして扱うことが求められます。そうすれば、学生たちは、善悪を判断する智慧を発展させることができるでしょう。学生に対する、可能な限りの真面目で真剣な態度が要請されます。学校は学生のために存在するのであって、教師のために存在するのではありません。

また、学生の側は、自校の創立精神を尊重する中で、教師を尊敬するようになり、両親を信頼するようになり、学生同士の友好を育てるのです。学生はいつも考えます。「どのようにしたら、私が尊敬し、信頼するこれらの人々

に応えることができるだろうか」と。そうして彼らは、次のようなことを認識するようになります。すなわち、学ぶことは、あらゆる人の幸福を追求することであり、労働や家族、社会における困難に対して闘うことの重要性に気づくことであると。

池田氏は述べています。「『人間』にしか『人間』は育てられない。『真の人間』にしてはじめて『真の人間』を育てることができる。情熱こそ、智慧の源泉であり、信仰の本質である。自分自身の弱さを克服することによってのみ、自身の人間性を耕すことができる」と。

牧口氏は確信していました。子どもの生涯の幸福を保証する教育が基本的に重要であるのは、それが子どもの直観力を育み、価値創造をする能力を発展させるからであると。そのような人間教育は、学生が挑戦的な精神をもって行動できる能力を育むのです。それはまた、持続的な向上心をもって、自己訓練をすることも可能にするでしょう。そうした人間は、情熱的な献身と誠意に基づき、さまざまな情況に柔軟に対応することができるでしょう。そして、冷たい心の人間になるのではなく、若々しい精神に満ちた快活な心をもってヒューマニズムへの信念を表明するでしょう。創価人間教育を永続的なものとするために必要なのは、価値の原理をつねに繰り返し確認しゆくことなのです。

参考文献

- *SGI Newsletter*, no. 1371, December, 10, 1993, pp. 4-5. —, no. 835, February 17, 1992, pp. 6-8. —, no. 177, June 13, 1989, pp. 1-11. —, no. 48, October 20, 1986, pp. 7-9. —, no. 51, January 20, 1987, pp. 1-8. —, no. 585, March 11, 1991, pp. 1-10. —, no. 236, October 22, 1989, pp. 1-16. 00, no. 71, August 5, 1986, pp. 1-6. —, no. 1370, December 10, 1993, pp. 1-3. *SGI Newsletter* (monthly), no. 122, January, 1993, pp. 99-105, pp. 12-18.
- A New Dawn in Human History, *SGI Value Creation Times*, vol. 1. no. 1, 1992, pp. 1-5.
- McLendon Max, Education for Value Creation, in *UK Express*, no. 146, August, 1983, pp. 1-2.
- Arnold Toynbee and Daisaku Ikeda, *Choose Life: A Dialogue*, Oxford University Press, London, 1976. 池田大作／アーノルド・トインビー『二十一世紀への対話』上下、文芸春秋、一九七五年。
- Joseph Derbalov and Daisaku Ikeda, *Search for New Humanity*, Weatherhill, Tokyo, 1992. 池田大作／ヨーゼフ・デルボラフ『二十一世紀への人間と哲学――新しい人間像を求めて』上下、河出書房新社、一九八九年。
- Daisaku Ikeda and Bryan Wilson, *Human Values in a Changing World, A Dialogue on the Social Role of Religion*, Lyle Stuart Inc, USA, 1984. 池田大作／ブライアン・ウィルソン『社会と宗教』上下、講談社、一九八五年。
- Ghali, Butros Mirrit, *Tradition for the Future: Human Values and Social Purpose*, The Alden Press, Oxford UK. 1972.
- Bethel, D.M. *Education for Creative Living: Ideas and Proposals of Tsunesaburo Makiguchi*, Iowa State University Press, USA, 1989.
- *Humanistic Education Through Faith and Practice*, Compiled by Educator's Group, Culture Division, Bharat Soka Gakkai.
- Chitnis Suma and P.G. Altbach, *Higher Education Reform in India: Experience and Perspectives*, Sage Publicatins, 1993.
- 牧口常三郎『牧口常三郎全集』第五巻、創価教育学体系(上)、第三文明社、一九八二年。同第六巻、創価教育学体系(下)、一九八三年。

〔本講演は、一九九四年五月二十七日から二十八日にかけて、インドのニューデリーで開催された、北インド地域の五十人の首長のための研究集会「価値的教育」の中で行われたものである。〕

（サティッシュ・クマール、ジャワハルラル・ネルー大学助教授）

（くりはら としえ・東洋哲学研究所研究員）